

山梨県甲府市

史跡 武田氏館跡 II

武田氏館跡関係資料集

1986

甲府市教育委員会

山梨県甲府市

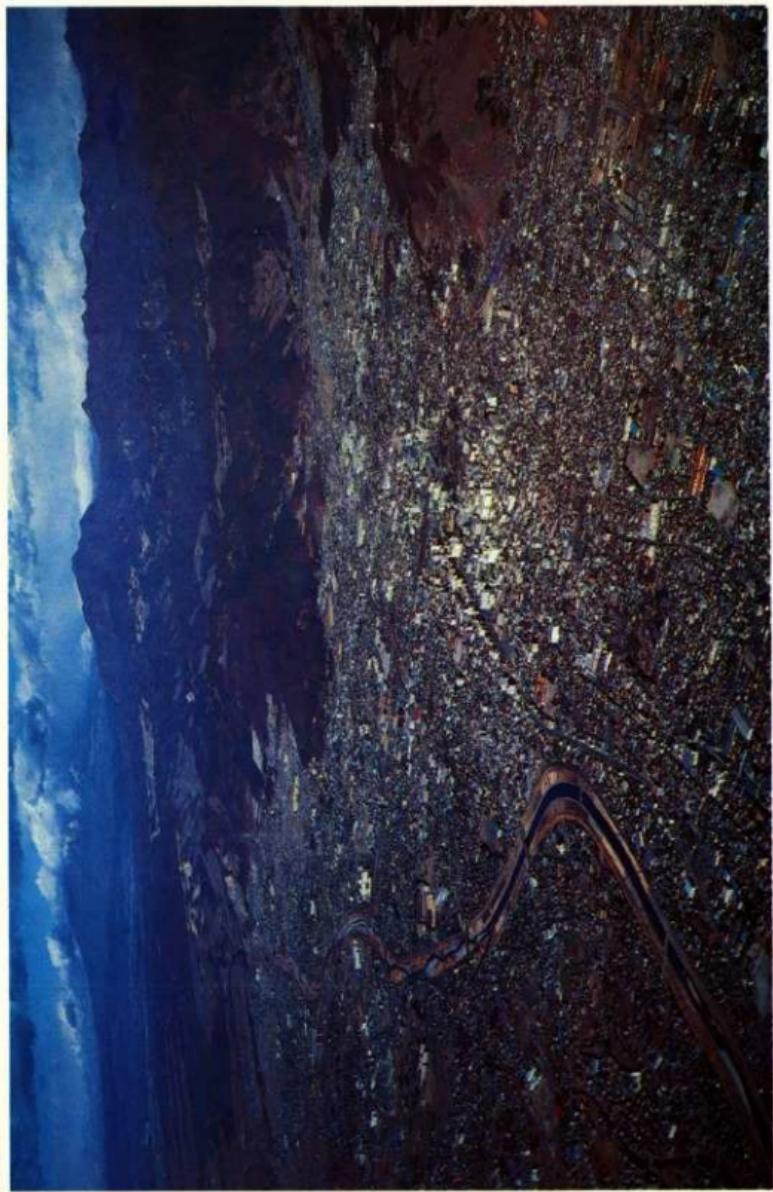
史跡 武田氏館跡 II

武田氏館跡関係資料集

1986

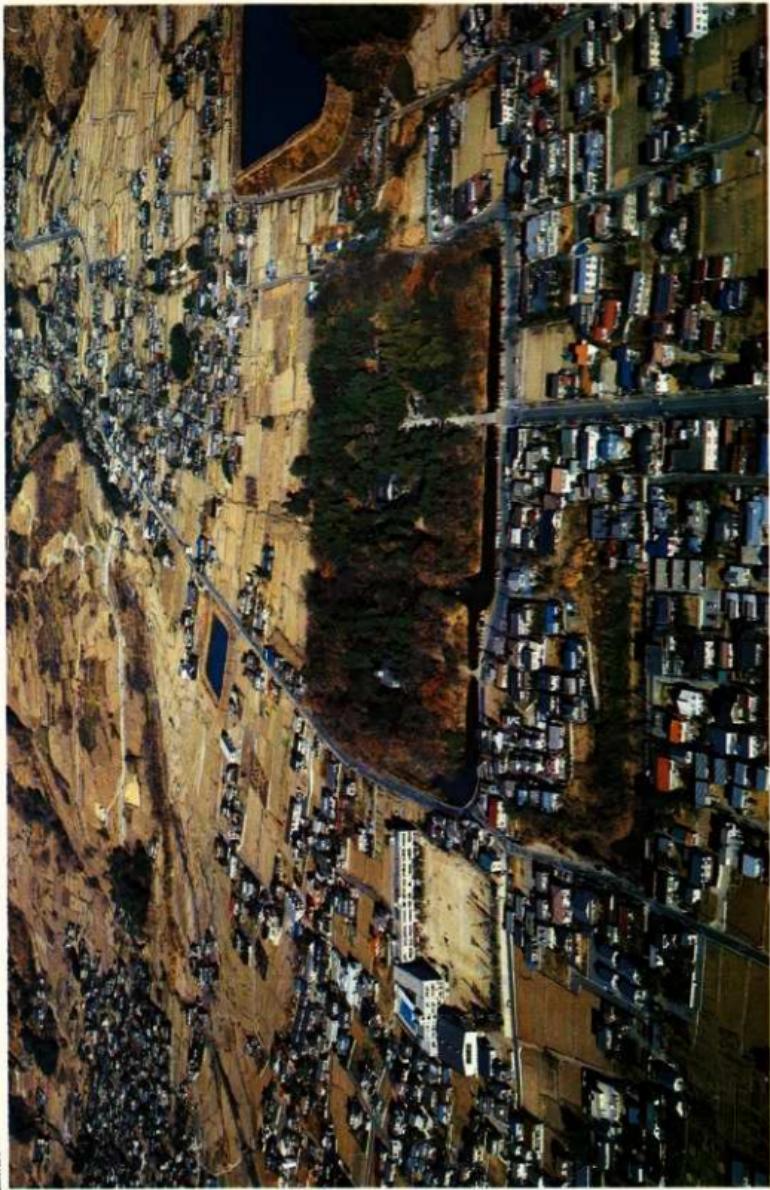
甲府市教育委員会

甲府市北部航空写真



(1985.12.20)

武田氏館跡附近航空写真



図版2



甲州古城勝頬以前図（惠林寺藏）

序

永正16年(1519)、武田信虎が川田の館から相川畠状地上に館を移転した折、甲斐府中の意味で「甲府」の地名が生まれました。

甲府の街は、武田信虎・信玄・勝頼の三代の戦国時代において、武田館を中心に南に広がる城下町として形成された中世都市であり、武田家滅亡後は地域をやや南に移動させ甲府城の城下町となって、以後甲斐国 の中心地として現在のように発展してまいりました。

現在の武田神社を含めた周辺一帯は、武田館を構成していた壮大な堀や土塁が保存状況よく残されているため、昭和13年に国史跡の指定を受けています。

武田氏館は甲斐・信濃・駿河・遠江・上野等の広大な地域を領した武田家の政治・経済・文化の中心地として重要な役割を果たしていました。この武田氏館跡の概要をまとめた本資料集が、歴史関係者をはじめ多くの方々に利用・活用されることを願ってやみません。

昭和 61 年 3 月

甲府市教育委員会

教育長 楠 恵 明

例　　言

- 1 本書は、甲府市が文化庁と山梨県教育委員会のご指導と援助のもとに、昭和60年度に史跡「武田氏館跡」の概要をまとめた資料集である。
- 2 本書は、多くの方々のご指導をいただき、甲府市教育委員会、社会教育課においてまとめた。執筆は、第1・3章を信藤祐仁、第2章を秋山敬、第4章を萩原三雄が分担して行なった。
- 3 摂図及び写真図版の作成については、多くの方々や諸機関から資料を提供していただいた。

○指導及び助言者

磯貝正義 山梨県立考古博物館館長	野沢昌康 山梨県考古学協会会長
田畠貞寿 千葉大学教授	柴辻俊六 早稲田大学図書館
水藤眞 国立歴史民俗博物館助教授	中沢信吉 甲府市文化財調査審議会委員
十菱駿武 山梨学院大学助教授	
服部英雄 文化庁調査官	芹沢昭彦 山梨県教育庁文化課長
秋山敬 県文化課副主査	新津健 県文化課文化財主事
萩原三雄 山梨県考古学協会事務局長	八巻与志夫 県埋蔵文化財センター 文化財主事

○資料提供

山梨県立図書館郷土資料室	恵林寺信玄公宝物館
武田神社宝物館	静嘉堂文庫
尊経閣文庫	桜井成広

○事務局

久保田敏夫 市社会教育課長	信藤祐仁 市社会教育課文化財主事
山本承功 市社会教育課文化係長	伊藤正幸 市社会教育課文化財主事
石井丈司 市社会教育課文化係	

本文目次

序	1
例言・組織	2
目次	3
第1章 武田氏館跡の位置と概要	4
第2章 武田氏館の歴史的沿革	6
第3章 武田氏館の構造	12
第4章 武田氏館跡関連遺跡	16

挿図目次

第1図 武田氏館跡位置図	5
第2図 武田氏館跡概要図	14
第3図 武田信玄公古城址	27
第4図 発掘調査地点位置図	28
第5図 武田氏館跡実測図(明治初年)	30
第6図 武田氏館跡付近明治年間地図	30
第7図 古府之図	31・32
第8図 M地点発掘調査全体図	33・34
第9図 M地点発掘調査出土遺物	35
第10図 N地点発掘調査全体図	36
第11図 N地点発掘調査出土遺物	37

写真図版目次

図版1 甲府北部航空写真	口絵
図版2 武田氏館跡付近航空写真	口絵
図版3 勝頼以前図	口絵
図版4 武田氏館跡航空写真	39
図版5 主郭通路等の現状	40
図版6 主郭堀等の現状	41
図版7 北郭の現状	42
図版8 惣堀と梅翁曲輪の現状	43
図版9 M地点検出遺構	44
図版10 N地点検出遺構	45
図版11 武田氏館跡関連遺跡(1)	46
図版12 武田氏館跡関連遺跡(2)	47
図版13 武田氏館跡古絵図(1)	48
図版14 武田氏館跡古絵図(2)	49
図版15 武田氏館跡古絵図(3)	50

第1章 武田氏館跡の位置と概要

武田氏館は館の東北から張り出した丘陵を躑躅ヶ崎と呼ぶため、躑躅ヶ崎館と通称されている。また、甲府城築城以後は、古城とも呼ばれている。館跡は、現在の甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目にかけて存在する。館の現況は、武田信玄を祀る武田神社境内地を中心として、その北側や東側では水田や桑園などの農地の中に宅地が一部存在し、南側は住宅街となっており、わずかに農地が散在している。

太良峰に源を発する相川は、甲府盆地に入るとその流れの急激な変化によって相川扇状地を形成している。館跡は、この相川扇状地の扇央部分、南に甲府盆地を一望のもとに見わたせる所に占地している。標高は 334 ~ 365 m で、日当たり・水はけの良好な緩傾斜地である。

館跡の前方西側に湯村山、西北側に和田山・鐘撞堂山、北側には要害山をはじめとし金峰山より続く丹那山系の山々が深い山腹をかかえており、東側には夢見山・愛宕山が連なる。このように、南側を除いた三方を山に囲まれた天然の要害の地に館は位置する。この立地について「左右鳥翼のごとく山々が張り出している」と古くから形容されてきている。

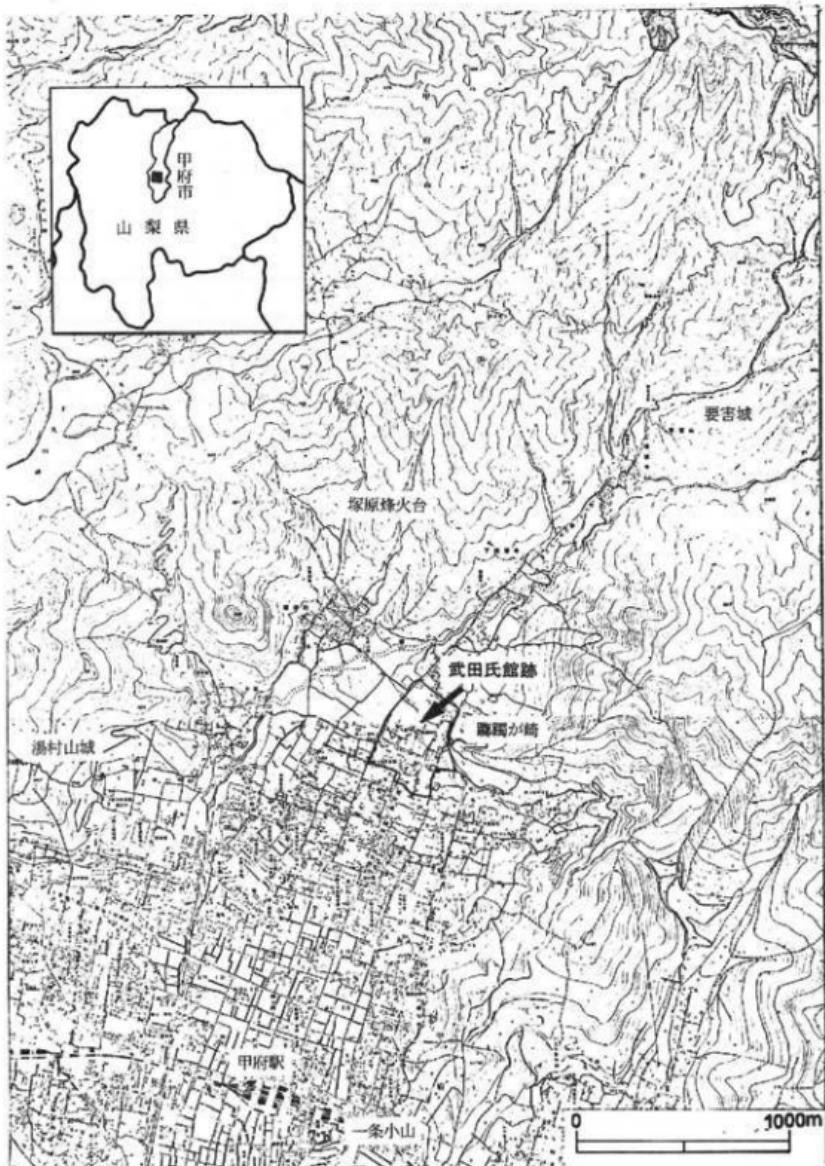
館を囲む三方の山々の北側には詰城である要害城が積翠寺丸山の地に築かれ、さらに北側には川岸城が控えている。前方西側の盆地に突き出た湯村山山頂には湯村山城、前方東の一条小山には寺としてだけでなく武田館の円丸的な施設をもった一蓮寺が存在する。また茶道・板垣山・塚原に烽火台を設置した。このように館跡を中心として、天然の地勢を巧みに活用して防備を固めている。

武田氏館跡の主郭部分は、東西 156 間 (284 m)、東北 106 間 (193 m) に及び、周囲に高さ 3 ~ 6 m の土壁と幅広く深い堀がこれを囲んでいる。現在武田神社が鎮座しその関連建物が存在する曲輪は、神社が建立される以前には、石壁や土壁によって東曲輪と中曲輪に区分されていた。また堀を隔てて西側には、藤村記念館が建つ西曲輪がある。これら三つの曲輪が主郭を形成していた。

西曲輪の北には堀と土壁で囲まれた北曲輪があり、現状でも土地の起伏や区画に当時の痕跡をよく残している。また、中曲輪の北に稲荷曲輪、東曲輪の北に隠居曲輪が、やはり土壁と堀に囲まれた曲輪として存在する。

中、西曲輪の南にも梅翁曲輪と呼ばれる一郭が存在する。郭の南と西の外縁部分は土壁が残り外側に松木堀と呼ばれる現在でも水をたたえている堀がある。この東側とこれに続く南の一部は、埋めたてられて宅地となっている。

館を中心として、この周辺に家臣邸敷数が配直されていた屋敷の配置としては、武田信繁・信廉・穴山氏などの武田親族衆、それに高坂・馬場などの有力家臣の屋敷が館近くに構えられている。現在では、家臣屋敷跡には明確な土壁・堀などは認められないが、道軒屋敷・土



第1図 武田氏館跡位置図

屋敷・中屋敷・長閑堀など、小字の遺称に往時を偲ばせるものがある。寺社も家臣屋敷の間に新たに建立されたり移設された。またこれらの南側を中心に商工業者の居住地区が存在し、館跡一帯は中世城下町的性格を有していたのである。

第2章 館の歴史的沿革

(1) 武田氏と館—鷹觸ヶ崎館成立前史—

甲斐國の中世史は甲斐源氏の発生とともに始まる。大治5年(1130)常陸國で乱行事件を起こし、その直後に甲斐國へ流罪となったと考えられる清和源氏の義清・清光親子は、そのまま甲斐國へ上着して甲斐源氏の祖となった。彼らの子孫は国内各地に分拠し、それぞれの土地の名をとって氏に称するようになるが、その中で武田(蓮崎市神山町)の地を領し、武田氏を称したのが清光の子信義である。

治承4年(1180)平家討伐のために甲斐源氏を率いて挙兵した武田信義は、富士川の合戦などで活躍、いち早く駿河守護に任命されるが、間もなく頼朝に諂外され、嫡子一条忠頼は元暦元年(1184)に謀殺され、自身も文治2年(1186)失意のうちにこの世を去った。その後も三男兼信は流罪、長男有義は逐電、叔父安田義定は謀叛の疑いで攻められ自害するなど甲斐源氏一族が次々に失脚していく中で、五男信光は、鎌倉幕府の信任を得て甲斐源氏の惣領として武田氏を嗣ぎ、甲斐武田氏の基礎を確固たるものにしたのである。

信光は、当初石和氏を称したことからもわかるように石和御厨に拠点を構え、石和町市部に館跡と伝えられるところもあるが、一国の武士を統轄すべき甲斐守護に彼が任命されたという確かな記録はない。しかし、鎌倉時代最末期の元弘元年(1331)、討幕を計画した後醍醐天皇追討の幕府上洛軍の中に登場する「武田三郎一族並甲斐國」(『光明寺残篇』)は、甲斐守護を示すものであり、『尊卑文脈』に見える武田石和三郎政義をさすものと考えられている(佐藤進一『鎌倉幕府守護制度の研究』)。政義もまた石和御厨に拠っていたことが知られ(『八坂神社記録紙背文書』)、また鎌倉時代を通じての甲斐國の情勢からしても、武田氏以外から甲斐守護が任命されたとは考えにくく、鎌倉時代初期の信光の時代から石和を中心とした地域に武田氏は勢力を持っていたものと思われる。

南北朝の争乱で北朝方として活躍した信武を経て、応永23年(1416)の上杉憲秀の乱に加担した当主信満が翌年木賊山(大和村)に敗死すると、守護武田家は存立の危機に陥った。信重は国外に退去せざるを得なかったのである。以後20余年間、逸見氏の強勢などもあって帰国できず、帰国後も逸見氏や守護代跡部氏との抗争があり、また国外の北条氏、今川氏の侵攻、信昌・信繩父子の対立など激動の時代が続く。

この時代の歴代守護の館と伝えられるところは、信成一清道院境内(八代町北)、信重一慈徳院境内(塙山市千野)、信重一成就院境内(石和町小石和)、信守一清道院境内(『甲

斐国志J)、信昌一石和館(甲府市川田町)と、石和を中心とするいわゆる東郡に集中しており、依然としてこの地域が政治的中心であり、また武田氏の勢力基盤であったと考えられるとともに、一代ごとに居館が移動しているのは、居館の規模や守護権力が躊躇ヶ崎館の時代と格段に異なることを示していよう。

(2) 踌躇ヶ崎館(武田氏館)の誕生

永正4年(1507)、父信綱の死に伴い信虎はわずか14才で家督を相続した。その後に、信綱と激しく家督を争った叔父信惠が再び反旗を翻した。信虎は、翌年10月の戦いで、信惠父子の他これに味方した岩手繩美や栗原氏、河村氏らを討ち取り、12月には国内に乱入してきた小山田弥太郎を戦死させている。さらに翌年には逆に郡内に侵攻し、小山田氏を攻め、永正7年(1510)これと和睦して味方につけた。永正12年(1515)には、西郡の一族大井氏が駿河の今川氏親の支援を得て兵を挙げ、それに伴い吉田方面へも今川勢が乱入、激戦が繰り広げられたが、同14年一応講和が成立した。

こうして当面の危機を脱した信虎は、永正16年(1519)ついに居館を川田から躊躇ヶ崎へと移すのであるが、これは守護大名から戦国大名へと脱皮するまでの画期的な意義を有する(磯見正義『武田信玄』)。

この年、4月までは今井信是との戦いがあった。それから4ヶ月足らず後の8月15日に「新府中御歎立テ初ム」(『高白斎記』)と、永年住みなれた石和の地から離れるため、甲府躊躇ヶ崎館の建設が始まるのである。当時信虎が小山田氏と結び、今川氏と和して国人層をある程度おさえて、国内統一への道を歩んでいたことは前述のとおりであるが、造営工事の直前には今川氏との戦闘があり、竣工直後には栗原・大井・今川氏らの有力国人の離反を招いており、決して安定していたとはいえない状況である。しかしながら、信虎自身が領国統一に強い意欲をもっていたことは明らかであり、彼にとって甲府移転は統一を推進するため兼ねてから考えていた懸案事項であり、今井氏戦闘後の4ヶ月足らずで決定したものではないといえよう。その意味で、「王代記」の「戊寅ノ年(=永正15年)甲府初立」という記事は注目に値する。この記事の具体的な意味は不明だが、政治の中心地としての“甲府”的遷定は既になされており、永正16年は具体的な館の建設が開始された年とする余地は十分にあると思われる。

鍛立式(起工式)の翌日、信虎の見分をうけた造営工事は急ピッチに進み、12月20日には信虎は夫人とともに入館している。また、翌年6月には積翠寺裏の丸山を信虎自身が見分し、30日から詰めの城としての築城工事にとりかかっている。この城がいつ完成したか不明であるが、翌大永元年(1521)8月には昌頼(姓不明、駒井か)が丸山城主に任じられているので、この時には出来上がっていたのであろう。これが現在の要害山である。さらに大永3年には湯村山の山頂に支城が築かれ、その翌年一条小山(現在の甲府城跡の地)にも要害が築かれている。

このように躑躅ヶ崎館を中心として北に詰めの城である丸山城（要害山）、西南に湯村山城、南に一条小山の要害を配し、三方に拡がる山脈を利用して、現在の甲府市北部一帯を一大城塞化した構想は、軍事的、防衛的機能からしても、他の戦国大名のそれと比べて決して過色がない。

成立当初の館の規模がどの程度であったかはわかっていないが、元亀年間頃の成立という「伝来の絵図」（写真図版8）によれば、単郭であって、現状とは異なっている（桜井成広『武田信玄公の屋形』①～⑤／『城郭』3巻2～6号）。時代の変遷の中で、次第に規模が拡張し、複雑化していくものと考えられる（『日本城郭大系』8巻）。

館は建立後、2度の火災に遭っている。一度は天文2年（1533）で、『勝山記』に「武田殿御所焼ケ申候、小山田殿ハ七十ツホノ家ヲ御作り、國中へ越被食候」とある。それ以前から小山田氏の屋敷が甲府にあったのかどうかはこの記事からは判明しないが、少なくともこれを機に70坪の家を新築し、甲府に居住（常住かどうかは別として）するようになったことを示すものと思われる。もう一度は天文12年（1543）である。正月3日の大風の日に道籠の宿から出火し、「御前ノ屋形」が類焼した。晴信は一旦高白斎の屋敷へ移るが、2月24日再び萩原彦次郎の宿から出火、高白斎の家は焼けたわけではないが、危険を感じたためか、今度は「御前ノ御屋敷」へと移座している。居館内以外にも府中に晴信の屋敷があつたことを示すものであろうか。

屋形の内建は間もなく始まった。『高白斎記』によると、常ノ間ノ御柱立（3.20）、常ノ間ノ御棟挙（4.6）、常ノ間へ御移り（10.2）、御主殿ノ柱立（天文13.3.13）、御主殿棟挙（3.24）、御主殿へ御移り（12.22）、とあって、まず日常居住空間である常の間、居館中の主建築である主殿が相続いで建てられたことが知られる（『山梨県の民家』）。その後天文20年（1551）には「屋形様ノ御台所」・「御曹司様ノ西ノ御坐」、翌21年には「太郎様御屋」・「御曹司様ノ対ノ屋」・「御能楽屋」などの建物名が見え、次第に整備されていった様子がうかがえよう。

この他『甲陽軍鑑』には居館内建物の名称として、御くつろげ所（品12）・毘沙門堂（品40）・御看経所（品40）・御弓の番処（品3）・御旗屋（品28）・御閑所（品33）・御風呂屋（品33）・御寝所（品19）・樂屋（品16）などが見える。また、品39には「御館、堀ごみあげ、普請の時」云々とあって、館としての機能維持のため定例的に堀の清掃等も行われていたことが知られる。

（3）甲府（古府中）の発展

躑躅ヶ崎の建設は、単に守護武田氏の居住空間あるいは防禦施設としてなされたものではない。信虎の領国經營の本拠として、家臣団の集住や商工業者の誘致をも図り、結果的には、経済的、文化的にも領国の中核となる城下町の建設を目的としたものであった。甲府の命名も“甲斐府中”的意であり、建設当初から甲府の名が登場するのは、領国甲斐の中心として

意識されていたことを示すものであろう。

永正16年12月、館の完成に伴い信虎は石和から移り住むが、それとともに「甲州府中ニ一国大人様ヲ集り居給候」(『勝山記』)と、有力国人層の移住を強行している。まず、府中へ在地領主層を移住させることによってこれを掌握し、権力の集中化を図ろうとしたのである。しかし、これは厳しい反撃にあった。翌年5月、「当國ノ栗原殿大將トシテ、皆々屋形ヲサミシ奉テ、一家国人引退玉フ」(『勝山記』)と、一旦は移住した国人のうち、栗原・逸見(今井)・大井らの有力者が在所に帰り、立籠ってしまう。これに対し信虎は、6月10日「同時三處一戦」(『塙山向岳禪庵小年代記』)に及び、それぞれ降服せしめている。一度に3ヶ所で戦闘を行っても勝利を得るだけの差が信虎と有力国人との間に生じていたことを示すものであり、この軍事力の差に対する自信がこうした甲府移住を強行させたともいえよう。

大永元年(1521)、新館に移った信虎にとって最大の試練がくる。かねてから大井氏などと結んで甲州へ侵攻してきていた駿河の今川勢が、大挙して侵入してきたのである。2月頃から駿河勢の攻勢がみられるが、9月に入ると遠江土方城主福島正成を大将として「数万人」(『勝山記』)が河内路を通って甲斐国中に乱入し、16日には富田城(甲西町戸田)を攻略した。その夜、身重の信虎夫人は新築になったばかりの丸山城へ避難している。駿河勢を迎えた信虎は、荒川河原において10月16日(飯田河原)、11月23日(上条河原)の2度にわたって対戦、甲州勢が大勝している。丸山城(もしくはその山麓の積翠寺)で11月3日に出生した太郎、後の晴信(信玄)が母大井夫人とともに館へ戻ったのは27日のことである。こうして館移転直後の最大の危機を乗り切った信虎は、以後領内の統治に意を注ぐとともに、城下町の整備もすすめていくことになる。館としても、これ以降勝頼が新府に移るまで戦いとの関連で登場することなく、居館及び政治的拠点としての役割を果たすのである。

城下町の形成には、まず街路の整備が求められる。飯沼賢司氏の復元によれば、館の周囲には、南北に5本の道路、即ち東から大泉寺小路、古籠屋小路—鍛冶小路—城屋小路と南北につながる通り、広小路、御崎小路—工小路、御厩小路—南小路—一条小路とが配され、南小路から六方小路が分岐するとともに、東西の道路としては穴山小路と聖道小路が確認できる(『戦国期の都市“甲府”』/『甲府市史研究』2号)。以下同氏の研究によって整理してみると、当時の城下の様子は次のとおりである。

前記の小路で区画された屋敷地区には、特定の職人等の名を付した鍛冶小路・工小路・連雀小路・番匠小路などの存在や、武士の職種を意味する近習小路やお小人町の地名があり、同種の職人や武士等の集住がある程度なされていたと考えられるものの、一般的には武士と町人の混住が特徴的で、近世の城下のように武士居住地区と町人居住地区的分離は明確ではなかった。また、これらの屋敷地区と区分されて、西南部の總坂路・逸見路を扼する位置に三日市場が、そしてそれと対角的に東南部に位置し、鎌倉街道・中道往還・河内路などの合流

点に八日市場が設けられ、甲府の経済を支えるだけでなく、領国経済の中心地として、また交通の要地を占めて伝馬制度などの交通統制の拠点として機能したのである。特に商・職人集団の編成・整備が進んだのは、信玄末～勝頼の時代のことと考えられる。これらの地区をとりかこむように、湯村山城・一条小山の要害と三方の山に開まれた周辺地域があり、これらを併せた府域は南北5キロメートル、東西2.5キロメートルにも及ぶ広大なものであった。

このような城下のなかで、館周辺には当然有力家臣の屋敷が配されたものと思われる。現在の地名にも残る館北部の「道軒屋敷」は武田信玄の弟信廉（道道軒信綱）の、また梅翁曲輪南部の「天久」は信廉の兄左馬助（=典厩）信繁の屋敷跡を示すものといわれる。江戸時代の絵図によれば、大手下の防衛上の重要地域には武田の重臣穴山氏・高坂氏・馬場氏の屋敷が配せられ、他の周辺部にも重臣らの屋敷が記載されている。個々の屋敷地の比定についてはまだ検討する余地が十分にあろうが、有力武将の屋敷が館周間に存在したことは認めてよい。

これらの有力武将の屋敷がどのような形態をもっていたかを示す好例がある。「高白齋記」の著者で、信玄の近臣駒井政武の屋敷造営に関するものである。政武は、天文21年（1552）府中に新屋敷を建立するが、「高白齋記」からその関係記事を拾うと、次のとおりである。

新屋敷ノ材木為取始（8月15日）、鍛立始（8.17）、地形屏普請始（8.27）
南門ノ石敷、同坐敷ノ石敷（9.3）、南ノ大門建、同坐敷表ノ柱一本立始、東門建（9.14）、土蔵建、上タンノ間ノ柱立、厩ノ柱一本立（9.16）、土蔵ノ雨屋立、
同面ノ坐ノ棟上、御上坐ノ棟上（9.19）、大門ノ棟樋渡ス（9.28）、釜ヌリ始
(10.12)、新屋敷へ各移ル（10.15）。

この記事によれば、政武の屋敷は南と東で道路に接し、周囲に塀をめぐらし、その南と東に門を開き、屋敷内には座敷、上段の間が別棟で建てられ、厩（馬屋）と雨屋付の土蔵があり、また別棟かどうか不明だが台所空間があったことがわかる（『山梨県の民家』）。この他翌年12月19日の「中ノ間座敷」も政武の屋敷内の建物である可能性がある。いずれにしろ、この時代の上級武将の屋敷は、機能毎の何棟かの建物で構成されていたことが知られ、こうした屋敷形態も今後発掘調査が進めば、確認されることも間近いであろう。

（4）館としての役割の終焉

信玄の死後家督を嗣いた勝頼は、天正3年（1575）5月長篠において織田・徳川の連合軍と戦い、大敗を喫した。その後も美濃の岩村城、遠江の二俣城、高天神城などを次々と失い、武田氏の傾勢は覆うべくもなかった。

長篠の敗戦の翌年6月には、帯那郷に命じ、川除その他の普請役に換えて「積翠寺御要害之御普請」を行い（石和町松本・三枝家文書）、府中防衛の強化を図ったが、結局既存施設の修築では十分ではなく、ついに天正9年（1581）正月真田昌幸に命じて、垂崎の七里岩の台地上に新城建設の工を起させた。この新城、即ち新府城は10月にはほぼ竣工し、12

月 24 日、勝頼は 60 余年にわたっての居館であった躑躅ヶ崎館を捨て、新府城に新天地を求めたのである。

その際、「古府中の御殿をば、悉く引破り（中略）泉水の植木共に、一かひ二かひある名を付たる松の木などを、きりすて給ふ」と『甲陽軍鑑』にあるように、躑躅ヶ崎館の館内はかなり徹底的に破却されたようであるが、後の利用状況から考えて土塁や堀はそのまま残されたものと思われる。

天正 10 年（1582）2 月織田軍による甲斐進撃が始まり、3 月 3 日勝頼は新府城を捨てて岩殿城（大月市）を目指したが、途中追撃にあい、11 日田野（大和村）において自刃、甲斐武田氏は滅亡した。

追撃してきた織田信忠が、古府中へ入って一条右衛門大夫信竜の屋敷を本陣にしたといわれるのは、居館がこわされていたためであろう。彼は、居館跡に仮の御殿を応急的に普請し、4 月 3 日織田信長をここに迎えた（『信長公記』）。

信長は甲斐国を河尻秀隆に与えたが、苛政を行ったため、6 月 2 日本能寺で信長が殺されるや、秀隆も一揆に襲われて死に、甲斐国は徳川氏と北条氏の争奪戦を経て徳川家康の手に帰し、平岩親吉が城代を命ぜられた。そして翌 11 年、家康自らによって一条小山の地に繩張りがされ、親吉の手によって新城の普請が開始されたと考えられる。

彼は天正 10 年 12 月から同 18 年まで甲斐国に居住するが、躑躅ヶ崎館を居館とし、甲府城普請の指揮などにあたったものであろう。新府への移転に伴い、一旦役割を終えた躑躅ヶ崎館は、再び生命を与えられたのである。恵林寺所蔵の「甲州古域勝頼公以前図」には、主郭南部のいわゆる梅翁曲輪は描かれておらず、「平岩七之介築候添曲輪ハ此図ニ略之」との注記があって、この曲輪を平岩親吉が増設したことになっている。また、主郭西北隅の天守台と称する石垣もこの時期に修築されたものといわれる。徳川氏が北条氏及び豊臣氏との緊張関係にあったこの時期に、手を加えられたところは多かったものと思われる。

慶長 16 年（1611）の古府中再繩水帳にみえる「梅雲やしき」は、加藤光泰の家臣井上梅雲斎栄秀の屋敷があったところから命名された地名と思われる（荻原三雄氏）。この梅雲やしきが梅翁曲輪を指すかどうかは検討を要しようが、加藤光泰の重臣が躑躅ヶ崎館近くに居住していたということは、甲府城が建築途上でもあり、加藤光泰時代（天正 19 年～文禄 2 年）頃はまだこの館が館としての機能を果たしていたと考えられよう。『甲斐名勝志』は、「川尻肥後守、平岩主計頭、羽柴少将、加藤遠江守住給ふ、浅野霜臺侯の時新城を築き遷給ふ」と記している。

甲府城のはっきりした完成年代は不明だが、加藤光泰、浅野長政、幸長の時に精力的に普請が進められ、文禄 3 年（1594）頃にはほぼ完成したという。この前後に古府中の社寺も新城下へ移転したという記録が多くあり、旧館が廃されるとともに、都市としての景観も急速に失われていったのであろう。慶長 16 年には、館周辺はほとんど耕地化され、「いつみやしき」、「てんきうやしき」「帶刀やしき」などの地名が残るのみであった。

(5) その後の武田氏館跡

甲府城が完成し、城を中心に新城下町が形成されると、古府中城下は南端部が上府中として甲府城下に取り込まれた以外は田畠となり、館跡自体は江戸時代を通じて荒蕪地として残された。『裏見寒話』は、「(天守台の)周囲に竹藪あり、今は御林と成て獵りに人の入事なし」と18世紀初頭の様子を記している。『甲斐国志』では、中曲輪が「松樹草荆」、西曲輪が「竹林茂密」で、中曲輪の大石の上に法性大明神の小祠が祀られていたといい、竹木の繁茂している様子は基本的には変わっていない。ただ名称は、喫館以来一般的に占城と呼ばれていたのを、柳沢吉保のときに御館跡と改めている。

竹木繁茂の状況は明治時代に入っても変わらなかったが、大正4年武田信玄に従三位が追贈されたのを機に館跡内に神社を創建することになり、同7年社殿の造営に着手、翌8年4月完成したが、この際南側に橋が新築され、東曲輪と中曲輪の間の土塁や石垣が整地された。

昭和13年5月30日、主郭と家臣屋敷跡の一部を含めた一帯が武田氏館跡として国の史跡に指定された。また、西曲輪には昭和41年に旧勝沼学校（重要文化財）が移築され、現在に至っている。

第3章 武田氏館跡の構造

武田氏館は、永正16（1519）年川田から当地へ館を移してから大正9（1581）年新府城に移転までの63年間、武田信虎・信玄・勝頼の三代にわたる居館であった。

この武田氏館の構造について、地形などの現況、古絵図、最近の発掘調査の成果等を考え合わせ、各曲輪ごとに概説する。

(1) 東・中曲輪

武田氏館は現在では複郭形式をとっているが古くは単郭であったらしい。現在武田神社が鎮座している部分が当時のもので、他の曲輪は徐々に付設されて規模が拡大していった。

桜井成広氏所蔵の古絵図（写真図版13）は永祿年間の古図といわれ、単郭構造で内部の建物配置が明瞭に記されている。

この図によると出入口は東・北・西の3カ所に設けられており、絵図上では建物の繪と「門」の字が記されている。大手口は東側にあたると想定される。東側の門を入ると内部の北側に御番所、南側に的山がある。中央に主殿と本主殿があり、火焼間、看経間、膳所が付設され、南に築山と泉水からなる庭園、北に御更方の建物と台所が存在した。この西北に太郎様御所と台所、西に看経間に続くクリと風呂屋、西南に蔵、二階ヤグラ、雪隠等が配置されている。館の鬼門にあたる東北隅には、毘沙門堂や不動堂が設置されている。

この中曲輪の看経間付近にあたる場所において、武田神社の社務所の建設に先立つ発掘調

査を実施したが、建物の礎石の一部が検出されたのみであった。瓦の出土もなく、当時の建物が他の一般的な戦国大名の建物と同様に、板葺ないしは茅葺であったことを伝えている。

東・中曲輪の大きさは、東西120m、南北130mの広さをもち、西曲輪も合わせたこれら主郭部分は、高い土塁と幅広く深い堀に囲まれている。現在この東・中曲輪には武田神社が鎮座し、本殿・拝殿・社務所・手水舎・宝物殿などの建物が建っている。古絵図にみられる東・中曲輪を区切る土塁と石垣は、大正7・8年の武田神社の造営に伴って削平され、現状ではその痕跡すら留めていない。

中曲輪の西北隅には天守や天守台と呼ばれる部分がある。これは中曲輪から約10mほど石垣を積み上げて土塁に接続しており、東西約30m、南北約40mの広さをもっている。その構造上の特徴から天正10年以後に構築されたものであろう。大手の入口は幅6.8mを測り、土塁を切断する断面の下部には野面積みによる石垣が、約80cmの高さまで存在する。この通路の部分には、平板状の約70cm四方の石が存在し、大手門の土台をなす礎石と思われる。この大手口と同様に、北と西の出入口部にも断面部分の下部に石積みがなされており、土止めの補強になっている。土塁の基底部には全体に石積みがなされており、特に北側の堀に面した部分では5~6段の頑強な石積みが顯著にみられる。

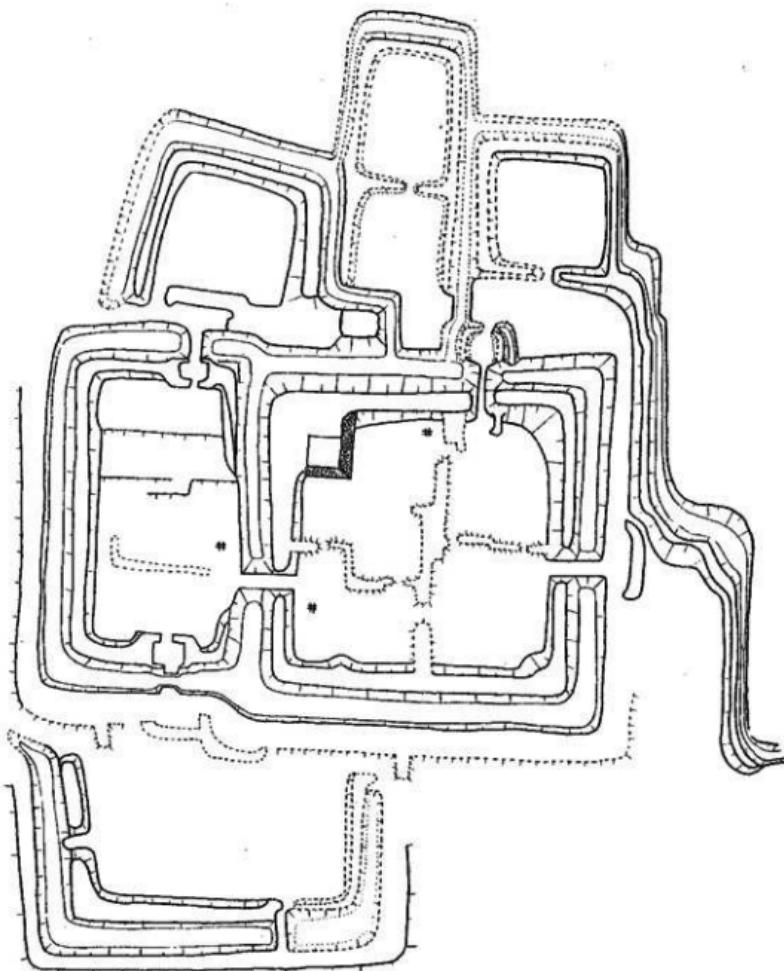
中曲輪を本丸、東曲輪・西曲輪を二の丸・三の丸と記す古絵図もあるが、二の丸と三の丸は反対になっている例もある。中曲輪南半部の土塁等で囲まれた部分を台所曲輪と記す古絵図もある。

(2) 西曲輪

恵林寺蔵の「勝頼以前図」によると、堀と土塁を隔てて東・中曲輪の西に西曲輪とこの北側に北曲輪が付設されている。西曲輪は、東・中曲輪よりも若干北側にずれた形で接続しており、北曲輪とともに新たに付設されたことを示しているようである。西曲輪は、東西67m、南北120mの広さをもつ。中央やや北側に、かつて曲輪内を南北に二分する土塁が存在していたが、現在はこの部分に約1mの段差がみられ往時の痕跡を留めている。この部分の通路は、西側に設けられていた。西曲輪の南半は、現在所々に、径1m以上の当時の建物の礎石と思われる大石が散在している。恵林寺の古絵図にも明記されているように、この東側に井戸が現存する。径1.3mの円形の石積みの井戸である。中曲輪の西南隅と中央東端にも井戸が記され、後者は現存している。

南と北にはそれぞれ出入口が設けられ、内側が樹形になっている。北側は、東西15m、南北18mの広さをもち、南側は、東西12m、南北15mである。両方の通路は、木の掛橋が架けられていたようで、堀の幅が狭くなっている。しかし北側の出入口部分はこれ以外の絵図では土橋が描かれており、現在も細い土橋となっているため、初期の橋が掛け橋でいずれかの時期に土橋に改造されたものであろうか。

堀は深くて幅が広く、東・中曲輪と西曲輪の東・中・西と南の堀は水堀となっており、北側と、北曲輪の堀は「カラ堀」と記されていて空堀であったことを示している。西南輪の北東隅に



凡 例

— — — 現存する遺構

— - - - 復元上の遺構

井 戸

第2図 武田氏館跡概要図

は、東西約 11 m、南北 20 m の広さをもつ権台らしい高所がある。ここは、中曲輪の天守台と堀をはさんで対峙する位置にあたる。この東側では堀底から石垣が積まれており、他の土塁部分との相違を示している。

現在西曲輪には、甲府市藤村記念館として重要文化財「旧韮沢学校校舎」が移設されている。

(3) 北曲輪・稻荷曲輪・隠居曲輪等

北曲輪は別名味噌曲輪とも呼ばれ、西曲輪の北側に位置する。この曲輪の内部は、東西、南北とも約 70 m のほぼ正方形であり、2 m 前後の高さの土塁がこれをとりまいている。出入口は古絵図によってさまざまではあるが、現況から推察すると、南・南西隅・南東隅の 3 カ所に設けられていたようである。南西隅のものは館跡への出入口、南は西曲輪、南東隅は稻荷曲輪への通路となっている。西曲輪に通じる細い土橋を渡ると角馬出しがある。現在この地は他よりも 1 m ほど一段高くなった桑畠となっている。この曲輪の堀は幅 10 m を超える広さをもち、北や東では明確に残るが西側では宅地化されていて判然としない。なお、この曲輪の北側は信玄の弟の武田通遼・信綱の屋敷跡と言われ、堀や土塁等の痕跡はみられないものの道軒屋敷の小字名が残る。

稻荷曲輪は、中曲輪の北側に位置し、小さながらも周囲を幅約 10 m の堀が隔てている。広さ東西約 20 m、南北約 15 m で、現在武田稻荷の石祠があり、その名称の由来を示している。

隠居曲輪は、東曲輪の北側に位置し、南北約 60 m、東西約 80 m の広さで、南北に 2 分されている。この曲輪は館の古絵図の中に描かれていない場合が多いが、現在の地形や地籍図からは明瞭にその存在が確認できる。この曲輪は、武田信虎が駿河に追放された後に信虎夫人の大井氏が隠居所として住んだ所だと言われている。北側の曲輪の通路は、土塁が東西から突き出た南中央部にのみ設けられている。南側の出入口は、主郭の東曲輪に通じる部分は樹形によって防備が固められており、南東部分は主郭の大手口に通じている。

隠居曲輪と北曲輪に挟まれた部分もかすかに土塁や堀の痕跡が認められ、古絵図には描かれなかった曲輪が存在している。この部分も隠居曲輪と同様に南北に 2 分されていたようである。

主郭の北側に位置するこれらの曲輪は、現在一部の宅地を除いてほとんどが水田や桑畠になっており、造成等の手があまり加えられていないため地形上の高低差や農地の区画に当時の土塁・堀・馬出しなどの諸施設がよく残されている。これらの地域は、両半部を中心に積極的に公有地化が進められてきている。

また、これらの曲輪の堀は連結されていたと思われ、相川から引かれ日影の集落を経た水が利用されていた。隠居曲輪東側の堀は南下して主郭の大手口の馬出しの東を流れ、惣堀の名が付けられている。さらにこの水は南下して藤川となる。この惣堀は、武田神社所有の貞享 3 年（1686）の古絵図によると 4 つの堀に分かれており、北から「柳堀」「用堀」「上ホリ」「下ホリ」の名がみえる。

(4) 梅翁曲輪

梅翁曲輪は、「様王」「梅王」とも書かれ、西・中曲輪の南に位置する。東西約130m、南北約90mの広さをもち、北・東北・南・西南・西北隅の5カ所に出入り口が設けられている。西曲輪への通路は掛け橋となっており、この南に大きな石壁の馬出しが設けられていたようだ。西南部も掛け橋で、曲輪の内側が一段低くなっている。南は土橋で、内側に梯形が設けられていた。この部分での堀幅は12mで土壁は21mを超える規模である。堀は松木堀と呼ばれる水堀か西半部に「L」字形に残るが、東半部は埋め立てられて宅地化され旧状を留めていない。

この梅翁曲輪内は宅地化が進み、住宅の新改築に伴って8件の発掘調査が実施されている。西北の出入口にあたるM地点では、礎石のほか石段状遺構や暗渠水路が検出されている。これらの遺構の上面は、焼土・炭化物層が覆っており、火灾にあったことを示している。調査区が限られているため、礎石に対応する建築物の推定や石段状遺構と門跡との関係など、不明な点が多い。N地点では、水路と堀が検出されている。両者とも東西に延びるもので、水路は開渠の石列、堀は上面2m、底1m、深さ1mの箱堀で、水路は堀の埋められた後に構築されている。J・P地点では、土塁の盛り土中に多くの遺物が含まれていたほか、土壁の基底において、堀または池と建物の礎石がそれぞれ検出されているため、土壁の構築前と後の二時期以上にわたっている重層構造が明らかとなった。他の地点でも多くの遺構や遺物が検出されており、遺構に重複関係のみられる場合が多い。恵林寺の「勝頼以前図」に梅翁曲輪が描かれていないことも考え合わせてみると、梅翁曲輪が天正10年の武田家滅亡以後に付設された曲輪である可能性が高い。

現在南側の土塁や堀の部分を中心として、公有地化も進められている。

(5) 家臣団屋敷等

館の周辺には、家臣団の屋敷や寺社が配置されていた。主郭の南東部にあたる一帯は、馬場氏・高坂氏・穴山氏の屋敷跡と言われる。現況では宅地と水田などが混在しており、微地形や地割からは、屋敷跡の痕跡は見い出せない。住宅の新改築に伴って発掘調査を6カ所実施したが、史跡の東南端にあたるO地点で遺物が検出されたにすぎない。

北郭の北には、武田道道軒屋敷跡や横田氏の屋敷跡があるがここも構造等不明である。

史跡の指定地域の周辺にはさらに家臣の屋敷があり、古絵図や地名からその存在は伺えるのであるが実態は不明である。

第4章 武田氏館跡関連遺跡

永正16年(1519)居館を甲府に移した甲斐武田氏は、引き続き相川扇状地一帯に、武田氏館を中心とした戦国城下町の形成と本拠地づくりを試み、道路を設け、家臣屋敷、商工業者の居住地、寺社等の配置や市の設置をおこなった。また、これらの城下町を大きく取り囲

むように、三方の山々を最大限利用して多くの城館を築き、「甲陽軍鑑」がいう「左右鳥翼の如く」展開する防御体制をしいたのである。

以下に、それらの城館址の概要を述べていきたい。

要 峰 城

武田氏館の北方約 2.5 km の地点にある上積翠寺町丸山に、武田氏の詰城として要害城が築かれている。館が築造された翌永正 17 年（1520）の着工である。「高白斎記」は、永正 17 年 6 月の条に次のように記している。

晦日氣_ハ積翠寺丸山ヲ御城ニ被_ヒ取立_ル昔請初ル。（闇）六月朔日「亥信虎公丸山ノ城ニ御登り。香積寺二被_ヒ下

この記録に、武田信虎が居館である武田氏館築造の翌年に築城に着手したことがはっきり見え、戦国大名の本拠地の城館の特質とされる。居館と詰城の構造が完成していったのである。

要害城は典型的な山城であり、丸山全体を巧みに利用して縄張りをおこない、防御面に力点をおいた構造をもっている。この様子について、「甲斐国志」は次のように述べている。

今ハ累壁荒レ荆棘塞_ル路、西南方ヨリ登ルニ腰曲輪、帶曲輪、類段々重リ、本丸ノ長三拾七間、広拾九間、二ノ丸、三ノ丸ト云アリ、絶頂ハ山背東ヘ続キ北ヘ曲ル、其間ニ堀切ノ跡モ有リ

ここに見える本丸、すなわち主郭部分は、まわりを土塁に囲繞された東西 73 m、南北 22 m の広さをもち、本城の中核をなしており、ここに至る山腹には連郭状にいくつかの郭を連ねている。郭と郭の間には門を設けて防御に工夫をこらし、守り第一の構造を保っている。虎口から主郭に至るちょうど中間付近に井戸が設けられているが、諏訪水と古くから呼ばれ、諏訪明神に祈禱して得たという（「甲斐国志」）。

主郭から谷をはさんだ東側の尾根上に、「要害城南遺構」と命名された遺構が存在している。細長い尾根を利用して郭を連続的に配置し、突端には監視台的な機能をもつ遺構も備えている。各郭は、土塁・堀切・帯郭等によって防衛され、戦国期の城館の特徴をよく示しており、要害城防護の一翼となっていた。

要害城の守衛に当ったのは、昌頼という人物であった。前記の「高白斎記」大永元年（1521）8 月 10 日の条に、「昌頼丸山ノ城主ニ被_ヒ仰付_ル」と見え、築城後まもなく要害城の城主としてその任についたことが知られる。この昌頼について詳しくは不明であるが、「甲陽軍鑑」、「甲斐国志」には石水守定番として駒井次郎左衛門と見え、あるいは同一人物かも知れない。このように城主が記録に登場する例は甲斐国内の城館では皆無に近く、要害城が武田氏の本城として重要な役割を果たしていたことの証差となろう。

しかし、要害城が具体的に使用された様子を伝える記録は少ない。大永元年に駿河今川氏の属将である福島正成の侵攻を受けた際に武田信虎の夫人がこの城に避難して、嫡子の晴信

(信玄)を生んだということぐらいで、この本城は平常時にはあまり使用されず、もっぱら武田氏館が日常生活と政務の中心的役割を果たしていたことを物語っている。

天正3年(1575)、長篠の戦に敗れた武田勝頼は、翌6月1日、要害城の近郷に人夫の督促をおこない、修築を命じている(石和町三枝家文書)。長篠以後の武田氏の不利な戦況をたて直すべく、急拠本城の整備を図り、新たな決戦に備えようとしたのであろう。しかし、勝頼は天正9年(1581)、垂崎市の七里岩台地上に新府城を築き、移転を強行し、以後居館と同様に本城も役割を終えていく。

武田氏が滅んだのちには、「慶長五年ノ後ワリ壞ス」(「甲斐国志」)まで、駒井右京、日向玄東斎、同半兵衛らがこの城の御番を務め、また甲府城築造に力を注いだ加藤光泰によって修築がおこなわれたという記録が見える(「裏見寒話」)。おそらく、居館と同じように、甲府城完成に至る間、何らかの形でこの城も再使用されたのであろう。

湯村山城

甲府市の北西郊にある湯村温泉にせり出すようにそびえている湯村山山頂に存在する山城である。「大永三年(中略)四月廿四日湯ノ島ノ山城御普請初。五月小十三日水神ノホクラ城ニ立」と「高白斎記」に見え、大永3年(1523)にこの城の築造が開始された様子がうかがえる。甲斐武田氏の本拠地の防衛上の一翼を担った山城であり、特に前方西側及び南側方面に対する防御に重要な役割を果していた。

眺望の大変すぐれた山頂には現在でも土塁が良好な形でとりまいて郭をつくり出しており、前記「高白斎記」の文中に見える井戸もこの郭内に残っている。門は、土塁を切断して設け、上壁の外側には帯郭を配置し、斜面には石積みも築いている。

一条小山

現在の甲府城址のある所は一条小山と呼ばれ、甲府城築造以前には名刹一蓮寺が存在していた。この一角に、古府中防衛のための何らかの施設あるいは城館が配されていた可能性が強い。「高白斎記」には、湯村山城の築造に着手した翌年の大永4年(1524)6月16日に「一条小山御普請初」とある。記述内容は詳しくなく、その後甲府城が築造されたために当時の状況をうかがうことはできないが、立地上から見ると、武田氏館の前方右に湯村山城、左に一条小山が配置される格好となり、戦国城下町の前方の防備がこれによって完成したと思われる。

河窪城

武田信玄の弟、武田兵庫助信実が警衛した山城といわれ、武田氏館の北方の守りの重要な拠点となった。甲府市川窪町にあり、北側を荒川、南側を高成川で挟まれている。城山と呼ばれる山の頂には平坦地、尾根上には堀切が存在していた。「甲斐国志」には、「高成村、西北山上ニ累壁アリ里人ハ谷ノ城ト呼ブ。武田兵庫信実警衛ノ處ナリ。因称、河窪氏。御岳ヘ相並デ北方ノ守備ト見タリ。自是方筋西保・窪八幡ヘ通路アリ」と記述され、山梨市方面へ通じる経路とその防衛を示唆している。武田氏の親族を配していることから、御岳方面や山梨・牧丘方面にらむ北方の要衝に位置づけられていたと思われる。

烽火台

甲斐武田氏が、急峻な山々を利用して烽火台を築き、烽火等によって軍事的情報を伝達していたことはよく知られている。こうした情報が古府中の武田氏館に集中するように、領国各方面に向けて縦横に情報伝達網が張りめぐらされている。ここでは、古府中に近接する一部の烽火台等をとりあげ、実態をながめていく。

武田氏館跡から北方をみると、恵運院裏山に鐘推堂山と古くから呼ばれている眺望のよい山がみえる。「甲斐国志」にも、「山頂ニ亭候ヲ構ヘ洪鐘ヲ懸ケ置キ急アレバ鳴之處ナリ。因テ以テ各トス。名柱礎ノ跡存シタリ」とあって、急あれば鐘を打ち鳴らして情報を伝えた所であると言われている。現在は恵運院の平和観音が立ち、かつてのおもかげは失なわれているが、山頂は平坦地形をなし、以前には礎石も存在していたという。

ここよりさらに北方面には、平瀬の烽火台、猪狩の城山、御岳の烽火台へと連携していて、烽火等が伝達された様子がうかがわれる。これらの烽火台は、近隣の村々によって維持されていたと思われ、山麓には集落が存在している。

烽火台の形態について詳細はあまり知られていないが、良好に残る平瀬の烽火台からながめて見ると、眺望の良い山頂にだ円形をした平坦地形をつくって主郭部とし、この周間に一段下がった帯郭をめぐらし、烽火台への虎口に石積みによる門などの防御施設を設けている。主郭部から一段下がる平坦面には、「番小屋」という地名が伝承されているところから、詰所的な建物が付属した可能性が強い。他の烽火台を見ても、これにはば類似した繩張りで、中世戦国期の城館址の中では最も簡単な構造となっている。當時管理されていたということよりも、緊急時に詰めて、情報伝達の役目を果していたと見るべきであろう。

このような最も簡単な構造の烽火台の他、先に述べた湯村山城のような砦的な機能をもつ城館址も、その情報伝達、集積の核としての役割を担っていた。湯村山城について「甲斐国志」は、「五里余ニシテ八代郡市川城ガ岳ノ雲火烽正南ニ対向セリ」と述べ、西八代郡市川大門町の古城山の砦と連携していた様子を伝えているが、烽火伝達網の要衝にはこうした防衛構造のすぐれている砦が配置していたと考えられる。

躑躅ヶ崎亭跡

「甲斐国志」に、「円光院頼ノ山ヨリ西ニ突出シ直ニ扇形ノ端門ニ相対セル山ナリ。松樹蔚然岩間ニ躑躅花多シ。山上ニ信玄遊覽ノ亭子ヲ構ヘシ迹アリ、礎石數枚荆藪ノ中ニ存セリ」と見え、武田信玄が月見や花を楽しんだ場所の伝承をもつ。礎石を利用した建物も存在していた様子がうかがえる。この地が躑躅ヶ崎と呼ばれるところから、武田氏館に躑躅ヶ崎館の別称が生まれている。

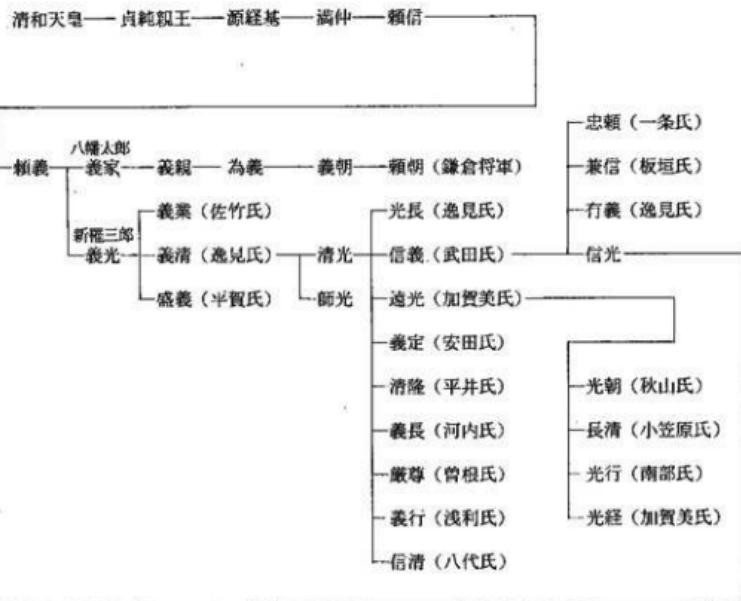
武田氏館跡を中心に以上のように多くの城館跡等が配され、それぞれの機能や役割を担って互いに連携しており、中世城館の典型的な特色をみごとにつけ出している。このような居館・詰城・砦・烽火台等を有機的に配した構造は、一国一城を特徴とする近世城郭と全く異なる様相とされるもので、相川脇状地一帯に戦国城下町を形成し、その周囲の山々を巧みに利用しながらつくり出した防衛体制は、戦国の雄と言われた甲斐武田氏の強大な勢力を今に伝えるものである。

武田氏館跡関係略年表

西暦	年号	月日	記	事
1494	明応3	1. 6	武田信虎、石和の川田館（甲府市）に生まれる。	
1505	永正2	9. 16	甲斐守護武田信昌没。	
1507	永正4	2. 14	甲斐守護武田信繩没、武田信虎自立。	
1519	永正16	8. 15	信虎、躑躅が崎に新府中歛立の儀を行う。	
"	"	8. 16	信虎、躑躅が崎検分。	
"	"	12. 20	躑躅が崎に信虎、夫人大井氏ら川田館より移る。	
1520	永正17	6. 30	信虎、積翠寺丸山に要害城の工を興す。	
1521	大永元	8. 10	積翠寺要害城落成。城主昌頼。	
"	"	9. 16	今川氏親の臣福島正成、甲斐乱入、信虎夫人要害城に避難。	
"	"	11. 3	武田晴信、積翠寺要害城内で生まれる。幼名太郎。	
"	"	11. 27	晴信、躑躅が崎の館に入る。	
1523	大永3	4. 24	信虎、湯の島山城（甲府市湯村山城）の普請を始める。	
"	"	12. 3	晴信、袴着の式を行う。	
1524	大永4	6. 16	信虎、一条小山普請を始める。	
1530	享禄3		信虎、上杉憲房の後室を側室とする。	
1533	天文2	春	府中武田館焼ける。	
"	"		信虎の嫡男太郎（晴信）上杉朝興の息女をめとる。	
1536	天文5	1. 17	晴信、従五位下大膳大夫に叙任。	
"	"	3.	太郎元服、將軍義晴の偏諱を受け晴信と名乗る。	
"	"	7.	晴信、三条公頼の女をめとる。	
1538	天文7		晴信の嫡男義信生まれる。	
1541	天文10	6. 14	晴信、父信虎を駿河に退職させ自立、晴信21才。	
1543	天文12	1. 3	晴信の居館類煙、駒井高白斎の屋敷に移る。	
1546	天文15		四郎勝頼生まれる。（母勘訪氏）	
1547	天文16	6. 1	晴信、「甲州法度之次第」（信玄家法）を発布。	
1552	天文21	5. 7	晴信母、大井夫人没。	
1558	永禄元		晴信、信濃守護に補任される。	
1559	永禄2	5. 2	信玄の法名が初めて禁制にみられる。	
1573	元亀4	4. 12	信玄、信濃伊那郡駒場で病没（53才）。	
1574	天正2	3. 5	信虎、信濃高遠で病没（81才）。	
1575	天正3	5. 21	勝頼、長篠の戦いで信長、家康連合軍に大敗。	

西暦	年号	月日	記 事
1576	天正 4	4. 16	勝頼、父信玄の葬儀を恵林寺で執行。
"	"	6. 1	勝頼、要害城を修築。
1581	天正 9	1. 22	勝頼、蘠崎に新府を築くため、分国中より人足を集める。
"	"	12. 24	勝頼、櫛淵が崎館を廃し、新府城に移る。
1582	天正10	3. 3	勝頼、蘠崎新府城に火を放ち、岩殿城へ向け退去。
"	"	3. 11	勝頼外田野（大和村）にて自刃。勝頼 37 才。
"	"	3. 29	信長、甲斐国領主に河尻秀隆を封する。
"	"	4.	織田信忠、櫛淵が崎館に仮御殿を普請し、信長を迎える。
"	"	12. 11	家康、新府の陣を撤して櫛淵が崎尾陣。
"	"	12. 21	家康、平岩親吉を甲府城代に命ず。
"	"		天正壬午の役後、駒井右京、日向立東斎、同半兵衛らが要害城の城番を勤む。
1585	天正13		家康、甲府城構張り、一蓮寺を倉田へ移す。
1590	天正18	7. 13	秀吉、秀勝を甲斐に封する。
1591	天正19		加藤光泰、甲斐受封。甲府城築城再開。
1593	文禄 2	11. 20	浅野長政、幸長父子甲斐受封。
1600	慶長 5		要害城廃城。
1601	慶長 6	2.	平岩親吉、甲府城代となる。
1686	貞享 3		「古府中村日影組村絵図」（武田神社蔵）描かれる。
1704	宝永元	12. 21	柳沢吉保甲府城主となる。
			吉保の代に櫛淵が崎館を古城から御館跡と改称させる。
1761	宝暦11		「古府中絵図」（県立図書館蔵）描かれる。
1919	大正 8		武田神社建立される。
1938	昭和13	5. 30	「武田氏館跡」国史跡に指定される。
1966	昭和41		西曲輪に重要文化財「旧睦沢学校校舎」が移設される。

武田氏系図



信春	信滿	信重	信守
武春（下条氏）	信元（穴山氏）	信長（房總武田氏の祖）	信介（穴山氏）
満春（布施氏）	成春（吉田氏）	信康（江草氏）	永信（小佐手氏）
武統（栗原氏）	信巻（下条氏）	信景（今井氏）	基経（八代氏）
	信久（市部氏）	信賢（巨勢氏）	賢信（下曾根氏）
	女子（小笠原氏室）	信広（倉科氏）	光重（金丸氏）
		信安（山宮氏）	

信昌	信範	信虎	晴信	義信
				竜方
				信親
				信之
				勝頼
				信勝
				盛信（仁科氏）
				信貞（葛山氏）
				信清
				女子 北条氏政室
				女子 穴山梅雪室
				女子 木曾義昌室
				信松尼
				女子 上杉景勝室
				女子 浦野氏室
				女子 大井氏室
				女子 繩津氏室
				女子 下条氏室
				女子 菊享大納言室

。『歴史と旅』臨時増刊号 第12卷第14号

「武田信玄縦覧」1985 より引用一部改変

武田氏館跡関係主要文献目録

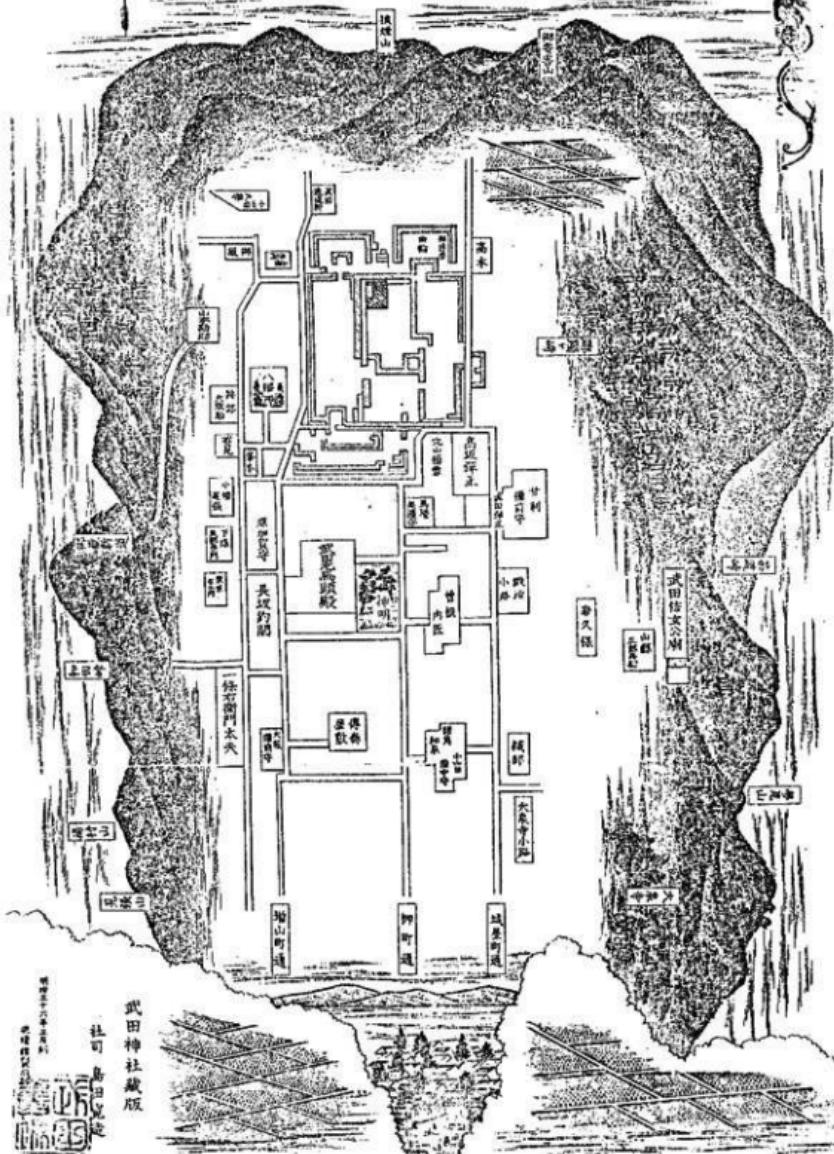
発行年	著者・編者	文 獻 名
1715	片 島 深 渕	「武田三代軍記」
江戸初期	小 帆 景 奏	「甲陽軍鑑」
室町後期	妙 法 寺 僧 侶	「妙法寺記」
"	普 賢 寺 住 僧	「王代記」
"	駒 井 政 武	「高白齋記」
室町末期	理 慶 尼	「理慶尼記」
"	不 詳	「甲乱記」
1905	内 藤 慶 助	「武田信玄事蹟考」
1943	渡 边 世 祐	「武田信玄の経営と修養」 1971復刻
1959	奥 野 高 廣 肇	「武田信玄」
1964	井 上 銳 夫	「謙信と信玄」
1966	土 橋 治 重	「武田信玄」
1944	広 潤 広 一	「武田信玄伝」 1968復刻
1976	土 橋 治 重	「武田信玄—物語と史蹟をたずねて—」
1799	磯 貞 正 義	「定本武田信玄」
1978	磯 貞 正 義編	「武田信玄」
1983	旺 文 社編	「武田信玄」
1972	上 野 晴 朗	「甲斐武田氏」
1978	"	「定本武田勝頼」
1982	"	「落日の武将 武田勝頼」
1984	上 橋 治 重	「甲州武田家臣団」
1980	坂 本 徳 一	「武田二十四将伝」
1973	磯貝正義・飯田文弥	「山梨県の歴史」
1967	野 沢 公 次 郎	「甲斐源氏と武田氏」
1953	山梨県教育委員会編	「山梨県文化財」
1982	武 田 神 社編	「武田のふるさと」
1981	甲府市文化財調査会 審議会	「甲府の歴史と文化」
1918	甲 府 市 役 所	「甲府略志」 1974復刻
1908	土 屋 節 堂	「甲斐国史年表」 1979復刻
1814	松 幸 定 能編	「甲斐国志」
1980	磯 貞 正 義外	「日本城郭大系」(長野・山梨)
1981	桜 井 成 広	「戦国名将の居城」
1965~67	なかざわ しんきち	「甲斐武田氏—その社会経済史的考察—」
1972	武 田 信 穂 公 宝 物 会	「原色武田遺宝集」
1919	土 屋 節 堂	「武田史蹟」 1979復刻
1978	萩原三雄・八巻与志夫	「甲斐の中世城館址研究」 どるめん18
1983	山梨県考古学協会編	「山梨の遺跡」

発行年	著者・編者	文献名
1983	萩原三雄・末木 健	「山梨の考古学」
1985	甲府市教育委員会	「武田氏館跡」
1980	上野 晴朗	「甲府・北山筋周辺における歴史・民俗と自然環境との関連調査」
1969	甲府城総合学習団調査委員会	「甲府城総合調査報告書」
1978	甲府市教育委員会	「甲府市の文化財」
1927	山梨県	「躑躅が崎館跡」史跡名勝天然記念物調査報告
1985	飯沼 賢司	「戦国期の都市“甲府”」甲府市史研究2
	桜井 成広	「武田信玄公星形圖に就いて」軍事史研究3-4
	鳥羽 正雄	「武田信玄公星形圖の一異本について」日本史学6
	成慶院 住職	「円光院武田系図」甲斐叢書 第8巻
1967	大類 伸仲	「躑躅が崎館」日本城郭全集 第4巻
	不 明	「甲陽造聞録」甲斐志料集成 第4巻
1986	柴辻 俊六	「開府前後の甲府」市史編さんだより5号
江戸中期	萩生 徒篠	「風流使者記」甲斐叢書 第3巻
1786	不 明	「甲陽隨筆」甲斐叢書 第2巻
	不 明	「甲國聞書」甲斐叢書 第2巻
	不 明	「兜嶋雜記」甲斐叢書 第2巻
	不 明	「甲斐國古城志」甲斐叢書 第7巻
1752	野田成方・野田正芳	「裏見寒話」甲斐叢書 第6巻
1915	上原 邦堂	「甲斐史」1979復刻
1976	山梨県高等学校教育研究会社会科部会	「山梨県の歴史散歩」
1984	角川日本地名大辞典編纂委員会	「角川日本地名大辞典—山梨県一」
1925	山梨県教育会	「西山梨郡志」1974復刻
1981	山梨郷土研究会	「山梨郷土史年表」
1967	上野 晴朗	「甲州風土記」
1983	信藤 祐仁	「甲府市躑躅が崎館跡」「山梨考古」 第10号
1984	中村 高志	「山梨の城」
1972	山梨日日新聞社	「山梨百科事典」
1957	中村 佛造	「要害山」
1783	萩原 元克	「甲斐名勝志」
1770	深井 彪	「諸国施城考」日本城郭資料集 1968
1978	八巻 与志夫	「全国城址一覧—甲斐国一」探訪日本の城 第2巻
"	土橋 治重	「躑躅が崎館」探訪日本の城 第4巻
1972	伊藤 祖孝	「甲斐文化財散歩」
1933~36	広瀬広一・赤崎重樹	「甲斐叢書」全12巻 1974復刻
1932~35	萩原 順平	「甲斐志料集成」全12巻 1981復刻
1975	報光資源保護財團	「武田氏遺跡」
1978	鈴木 亨	「甲州歴史散歩」—武田三代の興亡—
1980	本多 光夫	「“ザ・マン”シリーズ 武田信玄」
1976	佐藤八郎・野沢昌康	「武田史跡めぐり」

武田氏館跡関係古絵図一覧表

番号	絵 図 名 称	所在・所有者	備 考
1	勝頼以前図	恵 林 寺	
2	御城廓之直図	武 田 神 社	
3	古府中村日影組村絵図	"	貞享3年(1686)
4	"	中 津 泉	安政5年(1858)写
5	甲府古城之図	山梨県立図書館甲州文庫	
6	躑躅が崎御屋形跡古図	"	
7	武田信玄公古城址	"	
8	古 府 中 絵 図	"	
9	甲斐国山梨郡古府中 武田信玄公屋敷構絵図	山梨県立図書館赤岡文庫	(写)
10	甲州古府之図	"	"
11	武田古城並武将屋敷図	"	"
12	武田古城繩張之図	"	"
13	信玄公屋形之図	桜 井 成 広	(江戸時代 写) (江戸時代 写)
14	" (伝来之絵図)	"	
15	甲州古府中御館	広島市立図書館浅野文庫	
16	躑躅が崎館絵図	"	
17	甲州古府中信玄屋敷図	静 嘉 堂 文 庫	
18	甲州古府之図	尊 経 閣 文 庫	
19	甲州古府中屋敷構	"	
20	武田信玄公御城之図	(旧) 内 藤 永 善	
21	信玄御屋敷図	鳥 羽 正 雄	
22	武田古城繩張之図	坂 田 典 信	坂田家文書
23	甲州古府中城図	岡 山 大 学 図 書 館	
24	武田信玄公屋敷構	池 田 家 文 明	「甲陽隨筆」
25	不 詳	"	「西山梨郡志」
26	武田古城之図	"	「並山日記」
27	古 府 城 図	"	「裏見寒話」
28	甲州古府中ノ城(信玄公御居城)	"	
29	武田古城繩張之図	"	「西山梨郡志」
30	古 府 之 図	"	「甲府略志」

中府古趾城古公室信田武

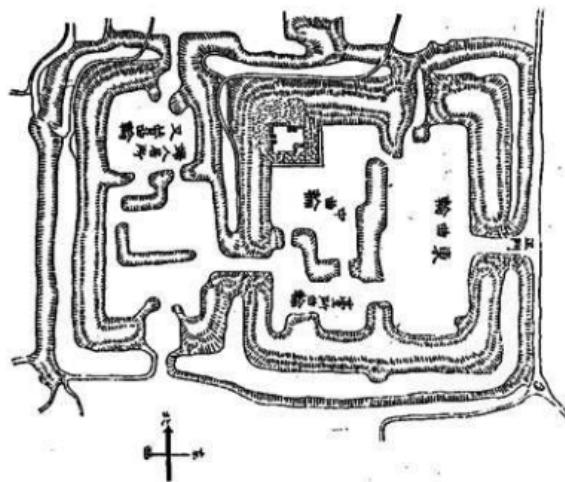




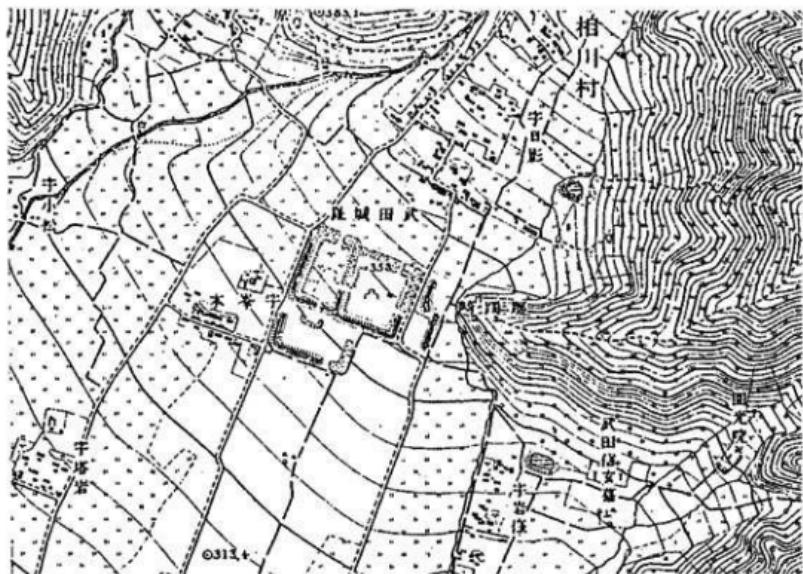
第4図 発掘調査地点位置図

武田氏館跡発掘調査地点一覧表

地点名	地番	調査期間	検出遺構等
A	古府中町2611	47. 3. 10~ 3. 15	特になし
B	"	54. 3. 20~ 4. 10	水路・水溜 他
C	星形三丁目2548-1	54. 9. 25~ 9. 30	水路
D	星形三丁目2559-1、2	54. 10. 1~10. 10	土師質土器・陶器
E	大手三丁目3688	54. 11	特になし
F	大手三丁目3691	54. 12	特になし
G	星形三丁目2537-2	55. 4. 9	特になし
H	古府中町3626	56. 2. 23~ 2. 25	特になし
I	星形三丁目2585-2	56. 2. 26~ 3. 8	暗渠・配石
J	星形三丁目2529-1	56. 4. 10~ 4. 18	土壠・石積 他
K	大手三丁目3711-2	56. 5. 14~ 5. 28	特になし
L	大手三丁目3742	57. 3. 21~ 3. 26	特になし
M	星形三丁目2577	(57. 5. 10~ 5. 16 57. 7. 8~ 7. 17)	暗渠・礎石 他
N	星形三丁目2545	57. 6. 20~ 6. 30	水路・堀 他
O	大手三丁目3696	57. 7. 20~ 7. 30	陶器・古銭 他
P	星形三丁目2563-1	58. 1. 16~ 2. 8	土壠・礎石 他
Q	大手三丁目3686	60. 4. 16~ 4. 23	特になし

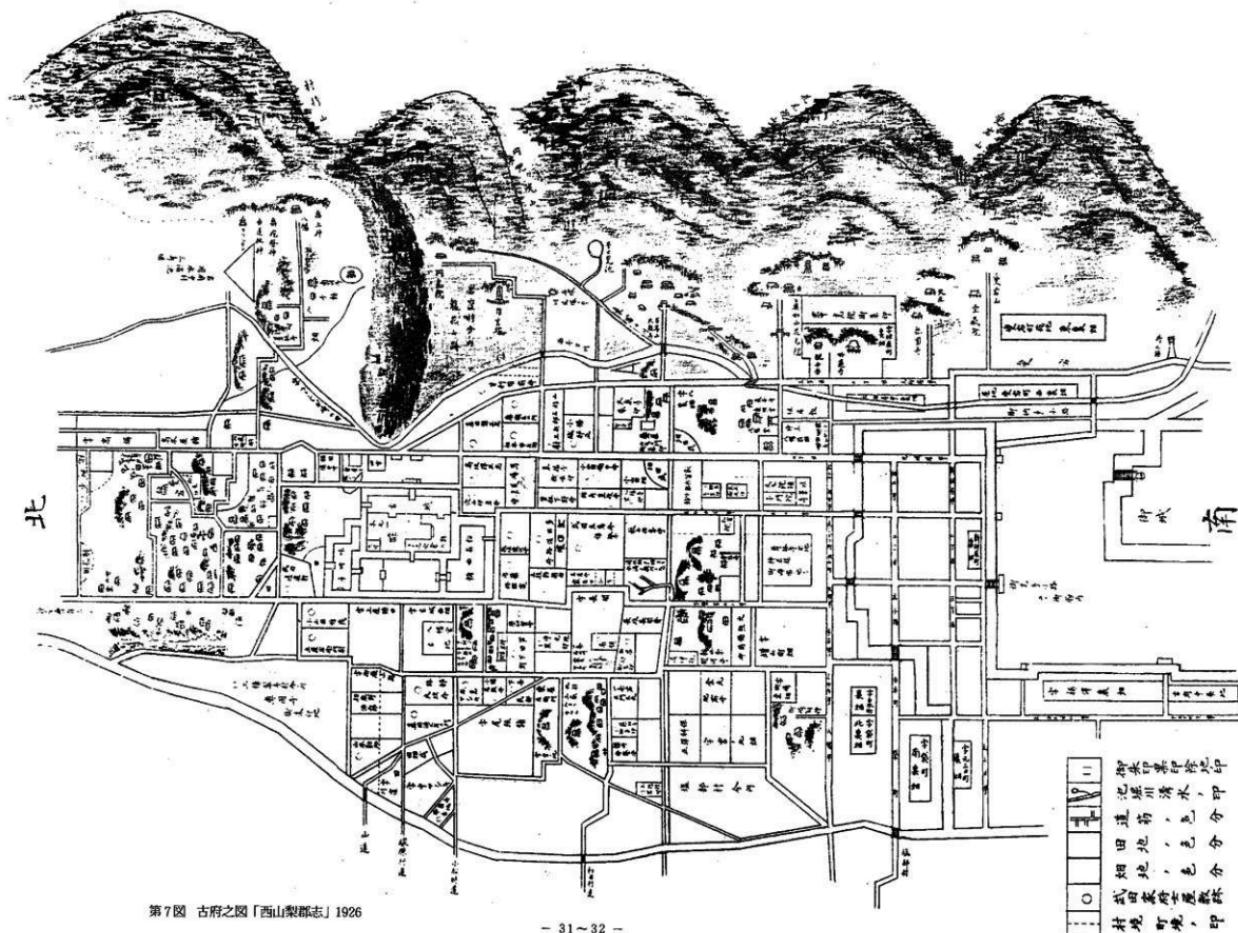


第5図 武田氏館跡実測図（明治初年）「武田信玄事蹟考」1905

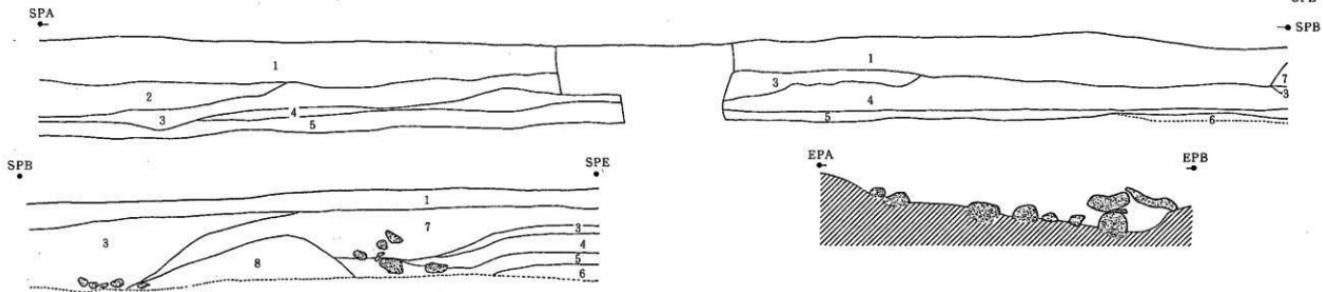
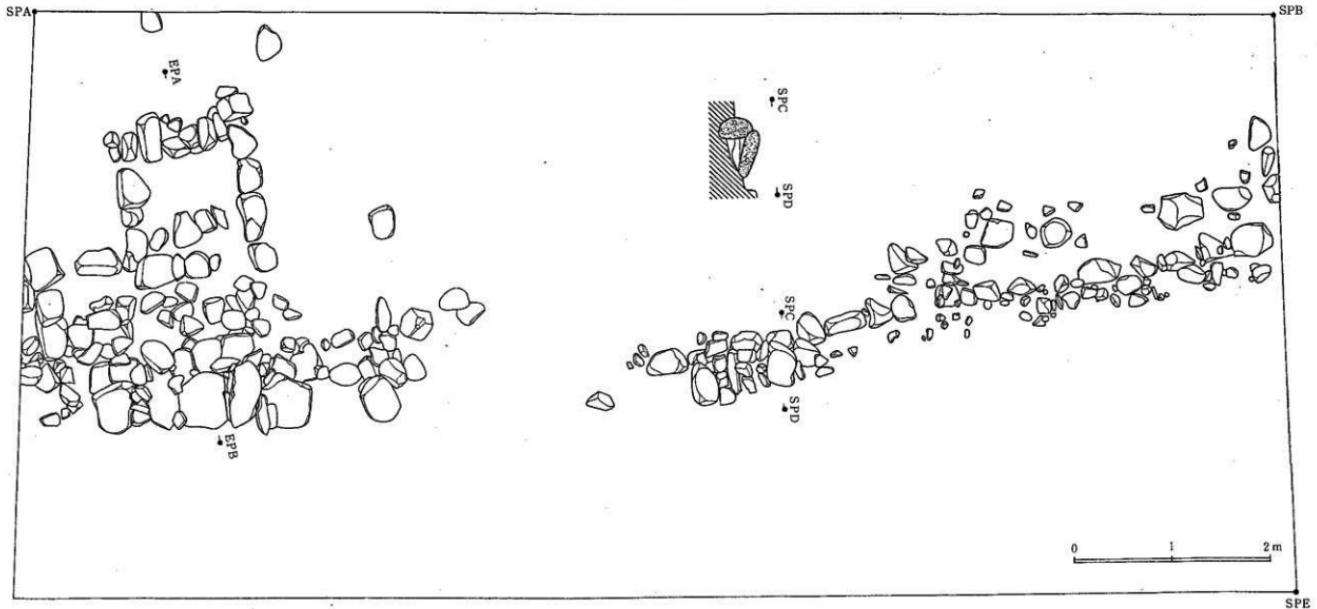


第6図 武田氏館跡付近明治年間地図（明治21年測量）

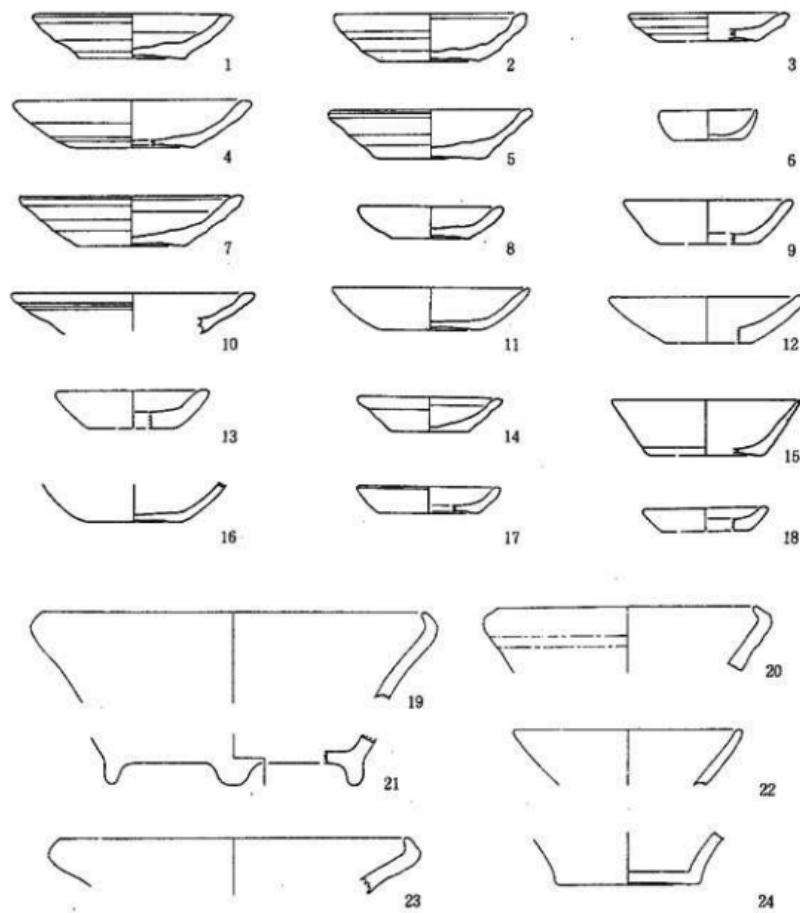
古方



第7図 古府之図「西山梨郡志」1926



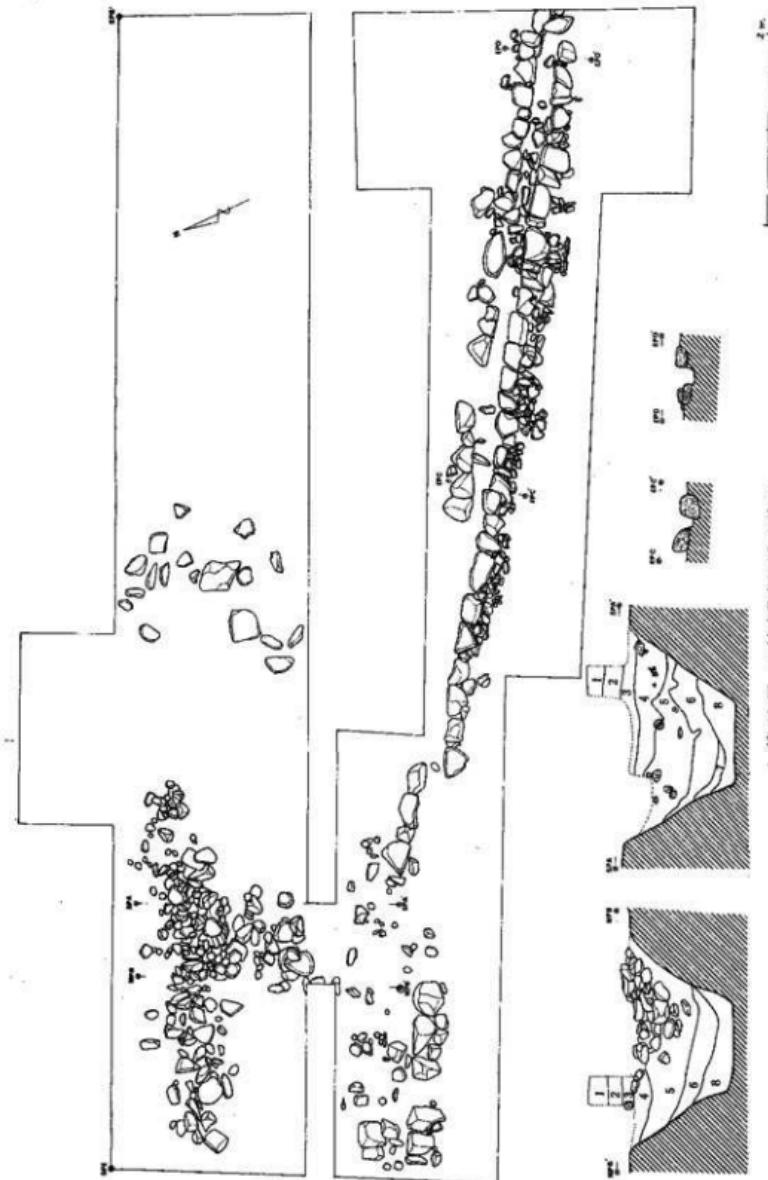
第8図 M地点造構全体図 ($S = 1 : 40$)

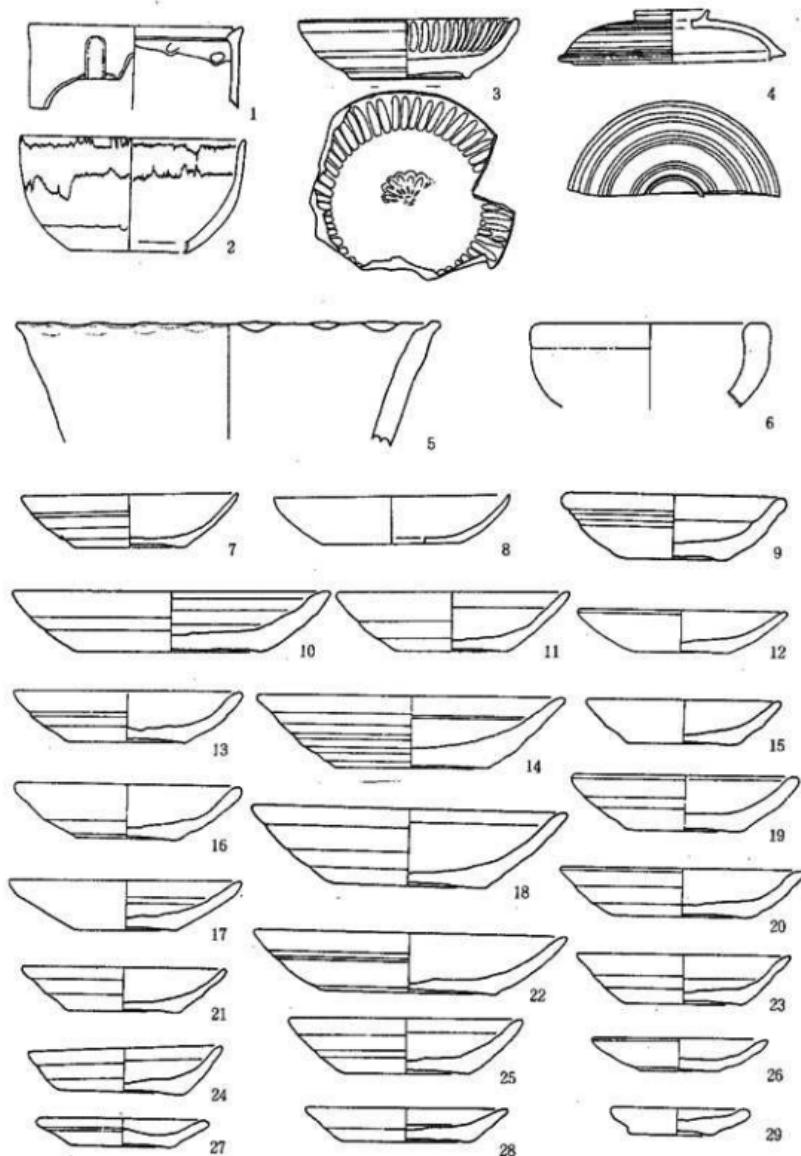


第9図 M地点出土遺物

(1~18 S = 1 : 3、19~24 S = 1 : 6)

第10図 N地点完掘調查全体図





第11図 N地点出土遺物 (S=1:3)



武田氏館跡航空写真（1984.12.16 撮影）

図版5



大手口（東曲輪東）より廊閣が崎を臨む



大手口の石積（北側）



中曲輪と西曲輪の通路



中曲輪と西曲輪の通路の石積（南側）



西曲輪北側樹形の石積



西曲輪井戸

主郭通路等の現状

図版6



東曲輪南側堀



東曲輪東側堀



中曲輪と西曲輪を結ぶ土橋の石積



東曲輪東側空堀



西曲輪東北側の土塁の石積



中曲輪北西側の土塁下部の石積み

主郭堀等の現状

図版 7



北曲輪東北側土塁（後方中央手前の山が要害城跡）



北曲輪東側土塁（北曲輪馬出し後方より）



憩居曲輪全景（憩堀側より）

北 郭 の 現 状



惣 堀 (北側より)



惣 堀 (南側より)



梅翁曲輪南側の堀 (松木堀)

惣堀と梅翁曲輪の堀の現状

図版9



暗渠石列（西から）



暗渠石列と礎石



石段状造構と暗渠



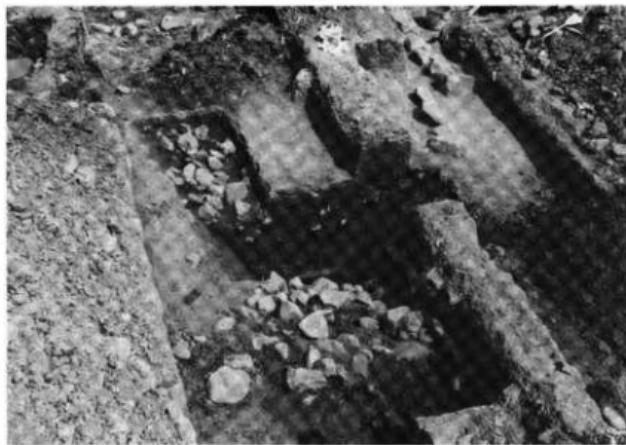
堀上面遺物出土状況



堀完掘状況



水路配石



堀

N 地 点 檢 出 遺 構

図版 11

要害城遠景



主郭



井戸（諏訪水）



武田氏館跡関連遺跡（1）要害城跡



湯村山城遠景

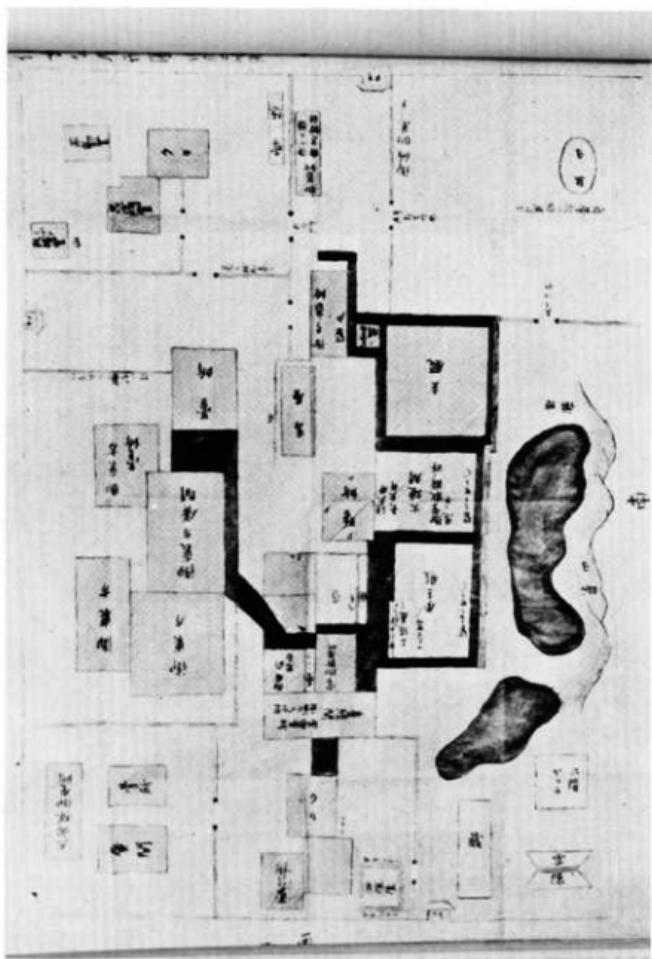


湯村山城（南より）



平瀬烽火台

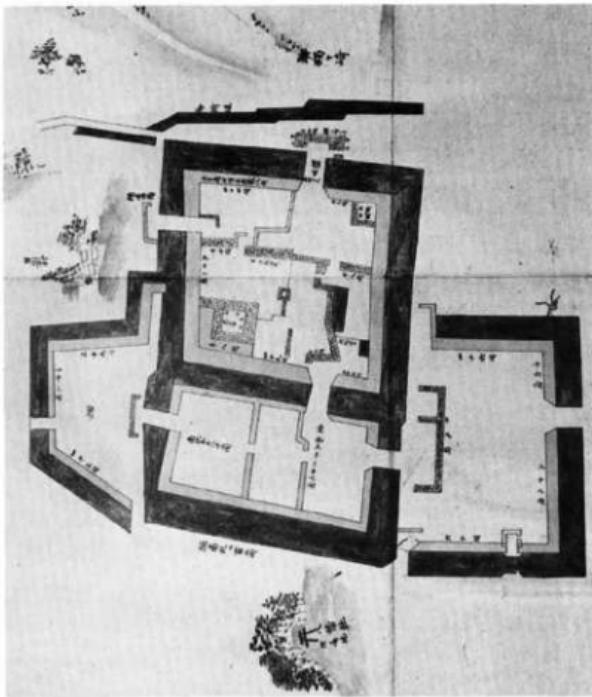
武田氏館跡関連遺跡（2）



山梨県の文化財 1955

甲府市古府中町

武田館跡平面図 (水保年間古図 東京 桜井成広氏藏)



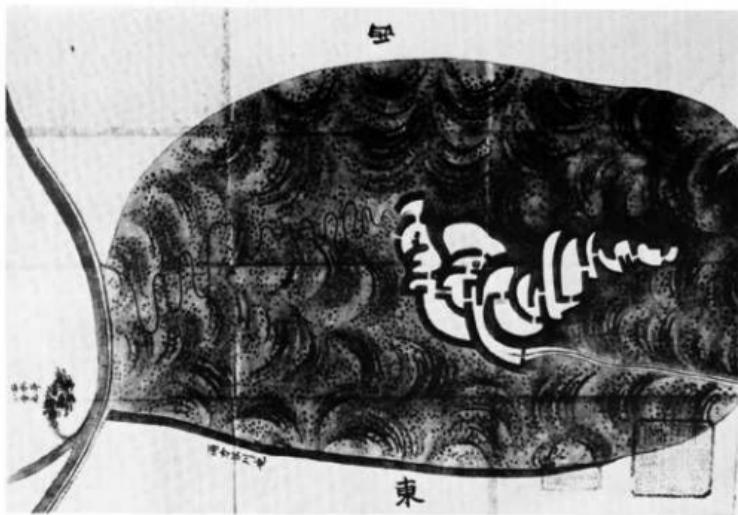
御城廓之圖

武田氏館跡古絵図（武田神社蔵）

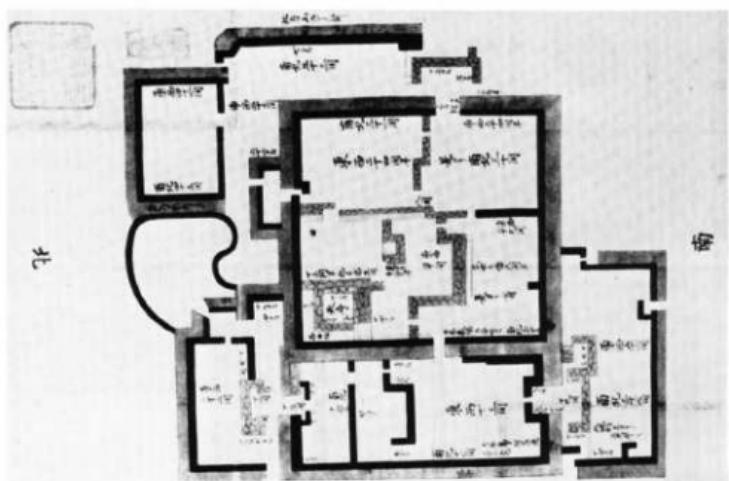


古府中村日影組村繪図
貞享三年（1686）

図版 15



要害城絵図（浅野文庫蔵）日本城郭大系 6 1980



栗原城絵図（浅野文庫蔵）日本城郭大系 6 1980

甲府市文化財調査報告 5

山梨県甲府市

史跡 武田氏館跡 II

武田氏館跡関係資料集

昭和61年3月31日発行

編集・発行 甲府市教育委員会
〒400 甲府市丸の内1-18-1
TEL (0552) 37-1161 (内線299)

印 刷 市平和プリント社

